剣士3人異世界入りっ！？

ネギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣士３人異世界入りっ！？

【Ｎコード】
Ｎ６５０１Ｎ

【作者名】
ネギ

【あらすじ】
テンプレ主人公×テンプレ脇役×ツンデレヒロインで送る異世界モノ～
間違えて短編に上げたという黒歴史付きｏｒｚ
しかもタグは文学（笑
作者の妄想多分ａｎｄ駄文ですが
お読みいただければ幸いです。

プロローグ（前書き）

間違って短編に上げましたが
連載です
申し訳ありません。

初投稿です
よろしくおねがいします

プロローグ

朝

まだ街は目覚めない午前４時

俺（神崎　幽）は公園の真ん中で一人木刀を持ってストレッチをしていた

まだ寒い中ゆっくりと体を伸ばしていくと
体の隅々まで血が廻っていく感覚が
正座をしていたあと立ち上がって痺れが取れるような感覚
が心地よく感じられる

ふと気配を感じて振り向くと、
よく知った大小２つの影が近付いてきた

大きい方の影がこちらに向かって手を振りながら
「しっかしユウ・・・お前も相当暇なのな・・・」
「風邪をひいてまで朝稽古に来るお前だけには言われたくなかったよ、賢人」

奴の名前は秋山賢人
小学校以来の腐れ縁だったりする。
出会いの話はまたいずれ。

その時フッと小さい方の影が消えた

ああ・・・またか・・・

慣れた体捌きで1歩前へ足を出し、木刀を背中にまわすと、
案の定　木刀へ衝撃が来た。

「だからっ！何でよけれるのよっ！！」
「おお、倉谷夏美１７歳、趣味は剣道、特技は常人には見きれない打突で
　全国大会にはかなり出場してたけど、優勝は未だ1度してないじゃないか。」
「だれにッ！説明ッ！してんだゴラぁ！！」
とても女の子の発言とは思えません。

「それにいくらスピードを早くしたって
　　1週間同じパターンで来たら誰でも分かるだろ・・・」
「うっさい！！」

もっそいスピードで打突を繰り返すなっちゃん（笑）

「誰がなっちゃんだぁ！！！！」

あ、口に出てた・・・

そんな感じで俺の1日は始まるのであった。

プロローグ（後書き）

嗚呼、黒歴史

次から日常編です

第1話（前書き）

お気に入り登録してくださった方、
ユニークしてくださった方、
本当にありがとうございます！！

では続きです。

日常・・・っていうかまぁ少しですけど・・・

そこから　異世界ワープまで。

完全ご都合主義＆いつもより妄想前回でお送りいたしまっせ！！

第1話

「ふっ」　「でぇい！！」

現在賢人と手合わせ中だったりする

なっちゃん一（笑）の方は１００合ほどしたところでバテてしまった

所要時間1分弱。

体力ねえな・・・

そんな事を思いつつ次々に襲ってくる賢人の剣撃を捌いていく。

賢人の特技は長い2本の木刀を高速で操るぶっちゃけロイドのアレだったりする。

と、そのとき

「フタエノキワミ！アッー！」

ここで日本語翻訳版を使わないのが賢人クオリティー。

それに二重の極みといっても、本当にできる訳はなく

ーいや、なっちゃんならできるかもー

2本の木刀を束ねて打ちつけるだけである。

確かに重い一撃にはなるのだが・・・

身をかがめて賢人の軸足に足払いをかける。

倒れると悟った賢人は咄嗟に左手の木刀を手放して側転。
俺の木刀を足で弾こうとする・・・
刃の方を。

おいおい、実際なら足切れてるぜ・・・？

賢人の足があたる前に俺はアッサリと木刀から手を離す。

そして・・・

「また負けたか・・・相変わらずのスペックだな・・・ユウ・・・」

「いや、お前あそこから側転とか無いだろ・・・」

俺がやったのは単純に捨てらた木刀を足で蹴って跳ね上げて、
拾って首に突きつけただけである。
え？　常人には無理？
いやいや、頑張ればできるよ。たぶん。

近くの自販でお茶を買って一（もちろん賢人の奢り）一息入れている
ると辺りはすっかり明るくなっていた。

なっちゃん「ギロッ」
ゲフンゲフン・・・夏美はまだ幾分気だるそうにしていたが、まあ
なんとか動けるだろうよ。

む、なんか嫌な予感がする・・・

すると、夏美がむくりと起き上がった。
そして・・・

「ユウ・・・おんぶ。」

「朝練の度にそれやめないか？」

普段の夏美からは考えられない上目遣いでのおねだり

こうしてると可愛いと思うんだがなぁ・・・

この顔にいつも押されて結局はおんぶしてしまう俺であった。

はぁ。

ｓｉｄｅなっちゃん

この作者は死にたいのかしら？

ｓｉｄｅ夏美

次は無いと思え・・・

あれ？作者ってなんだっけ？

まあいいか・・・

あたしは今ユウにおんぶしてもらっている。

べ、別にユウの背中があったかくて気持ちいいな～なんて思って無いんだからねっ！？／／／

そこっ！！テンプレとか言わないッ！！

まったく・・・

って、あたしが言いたいのはそんな事じゃなくて、ユウはあれだけ動いて、つまり、２人を連続で相手にして全く汗を書いてないってこと。

それはたぶん、あたし達じゃ全然本気を出せないってことなんだと思う。
実際あたしと打ち合ってる間なんてソッポ向きながらポケットに手を突っ込んで口笛吹きながら片目瞑って片手で全部打ち落としてたんだからねっ！？
なによあの剣術はっ！！

さっきまで右下に剣先があったと思ったら、今度は左上から切りかかってくるし、
左手で剣を振ったと思ったら、右手に持ち替えてるし・・・

あんなの剣術じゃない！！
あたしは認めないわッ！！

あ～・・・考えてたイライラして来た・・・

背中抓ってやろ。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「いててててててッ！！！」

「どうした？　ユウ　」

「こいつ俺の背中思いっきりつねりやがったっ！！」
「抓ったやつは幸せそうな顔して寝てるがな・・・」
「どんな夢見てんだよ・・・」
☆★☆★☆
「「ごちそーさまでしたー」」
「うい、お粗末さまでした」
朝練→学校の準備→俺の家で飯→登校
というのが、俺たちの行動の固定パターンである。
朝早くから親を起こして飯を作らせるのはさすがに悪いしな。
付き合ってもらってるせめてものお礼といったところか。
柄じゃないとは思うから言わないけど。
ちなみに俺は一人暮らしである。
親は死んでないけど、とある事情により別居中だ。
ここ2年間は顔も見てない。つーか見たくない。
この話はまたいずれするとしてだ・・・
「お前らあんましくつろいでっと遅刻すっぞ？」
「え、今日って始業式だから朝課外ないでしょ？」
キョトンとした顔で夏美が言う。

「・・・ぇ」

「ハ、もしかしてユウ・・・とちったか？」
今にも笑い出しそうな感じで賢人が言う。

「イヤ、ソンナコトハナイヨー」
２人の視線を受けて俺はカタコトで否定するのが精一杯であった。

チキショー！！！！

☆★☆★☆
本日の時間割・・・
始業式　８時４０分　～　９時４０分
大掃除　９時５０分　～１０時３０分
ＬＨＲ　１０時４０分　～１１時３０分
下校

半ドンでござる。

が・・・

「・・・ですから、この２学期からは勉強に精を出し・・・」

くっそねみぃ・・・

あの校長のふっわふわしたわたあめのような壮大な甘っちょろい話はどうにかならんもんか・・・

生徒たちの列の外、先生が開閉会宣言を行うマイクの横から校長の

話を聞いている。
俺は実は生徒会に入っていたりする。
所属は風紀委員長。

会長曰く、
「やっぱ風紀委員長は木刀だよねっ！！」
らしい。

意味ワカラン。
いや、わかるけどさ。

毎日校門の前に立たせて木刀持たせるのはどうかと思うよ？

俺が就任してから遅刻者はグッと減ったけど。
ナンデダロナー。

あー思考がまともにならなくなってきた。

ちょっと寝よう。
おやすみ・・・

ｓｉｄｅ　？？？

どこか神殿の中のようなところに彼女は立っていた。
その体はとても小さく、
その手には小さな体には似合わない、とても長い杖を持っていた。

「ようやく・・・ようやく術式陣が完成しました・・・」

彼女が描いた陣は、神話に出てくるニンゲンを呼び出すもの。
―この陣によって呼び出される者が、私たちに協力してくれますように・・・―
願いとともに彼女は魔力を陣に流し始めた・・・

side out

「・・・ウ・・・きて！　ユウ！！」
「いふぁふぁふぁふぁふぁふぁふぁっ！！」
そりゃあ突然ほっぺたを抓られたら、こんな間抜けな声も出るだろう。
「ったく、いつまで寝てるのよ・・・　もうとっくに終わったわよ？始業式。」
「げ、またかよ・・・」
実はこれが3度目である。
「センコーは？」
「あとで職員室へ来るように　ってさ。」
「うげぇ・・・　やっちまった・・・」

「自業自得ね。　そんなことより早くＬＨＲ行くわよ？」
「んぁ？掃除は？」
「終わったわよ！　寝ぼけすぎ！時間見たら？」
「現在１０時５０分・・・　ぐっは　掃除もサボったか・・・」
「こりゃあこってり搾られてもしらないからね～」
「ん？ちょっと待て、お前もしかしてずっと待ってたのか？」
「なによ？なんか文句ある？」
「いや・・・　ありがとよ」
「っ！！！／／／／　ほら！さっさと行くわよ！！！」
ツンデレいただきましたー
☆★☆★☆
「・・・だいたいからしてお前のようなやつが風紀委員を・・・」
「あーはいそーですねはいそーですねはい」
「聞いているのかっ！！？」
「イイエキーテマセン」
とてもではないが怒られている態度ではない。

が、先生ももう半ばあきれているので、
社交辞令的なものである。
「以降二度とこういったことがないように！」
「はーい」
あー、やっと終わった。
だり～・・・・
なんかこの後も面倒なことが起こりそうな予感がするのは気のせいだろうか・・・・
☆★☆★☆
教室に戻ると、賢人と夏美が待ってくれていた。
「おう、どうだった？　っていってもお前は怒られているようで怒られてないからなぁ・・・・」
「諦めの境地ね・・・・」
「うるせー　眠いものは眠いんだ！　体の欲求に素直にこたえて何が悪いっ！！」
「「開き直るなっ！！」」
怒られましたー。
☆★☆★☆

時刻は１３時ごろ。
俺って結構長い時間怒られてたんだなー。
記憶無いけど。

３人並んでグダグダ帰るのは、恒例である。

「「「暑い・・・」」」

残暑というものは思った以上に体にこたえるもの。
心頭滅却したって暑いものは暑いっ！！

はぁ・・・　ん？

なんか違和感を感じる。
自分の周りに何かがまとわりつく感覚。
いや、湿気とかはもともとまとわりついてるけども・・・
俺は別に薬物はやっていない。
幻覚ではないと思うのだが・・・

「なぁ・・・お前ら・・・」

「やっぱユウも感じてるか・・・」

「なんか嫌な予感しかしないのよね・・・」

何だ・・・？コレは・・・・？

ふと足元をみると、俺たちの下には大きな黒い穴が開いていた。

「「「ッ！！！」」」

落ちる。落ちる。落ちる。
ただ落ちていく。

「「「テンプレェェ

ｓｉｄｅ　？？？

やった！！！成功だっ！！！

おそらくだが、あれほど膨大な魔力を持った生物など、ニンゲンしか居ないだろう。

が、喜びのあまり、彼女は魔術の制御を誤ってしまった。

「わっ！！はわわわわわわ！！！」

膨大な魔力を伴った魔術陣は召喚される者たちの転送先を変えてしまった。
行き先は・・・・

「国境付近・・・どうしようっ！！このままじゃ国境警備隊が全滅させられちゃう！！！」

１人はわはわする少女。

「とっとにかく！使いを出さなきゃ！！！　リフルさんっ！リフルさーん！！！」

第1話（後書き）

勢いで書きました。後悔も反省も・・・
はい。ものすごくしてます。

つたない文章ですが、これからも精進していきたいと思っています。

次回からここではキャラ紹介を少しずつしていきたいと思います。

第2話　異世界入りとかマジ勘弁ｗｗｗ　ｂｙユウ（前書き）

更新が遅れてしまった事、申しわけございませんでした。

言い訳はいっぱい有りますが・・・

お恥ずかしい理由なので言いません。

サブタイトルは時々ネタです。

あれ、フリスビーにすると良く飛ぶんですよね～

というわけ？で2話です。どぞ。

第2話　異世界入りとかマジ勘弁ｗｗｗ　ｂｙユウ

ｓｉｄｅ　賢人

むっ！？

俺はさっきまで、アスファルトの上を歩いていたぞ？

だがなぜ今は森の中に？？？

少年黙考中・・・

ふむ、やはりそういう結論になるよな！うん！

俺は、森の中で寝るのが好きな人だったんだ！

ー彼は非常に頭が残念な人です。ー

そうと決まればもう一眠りだっ！！

それでいいのか・・・？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺は夢を見ていた。

随分昔の事。

俺がまだ小学校４年生ぐらいのころ、俺は祖父のやっていた剣道の道場に通うことになった。

祖父はそりゃあ可愛がってくれた。

だが、他の兄弟子達は、それが気にいらなかったらしい。

俺はイジメとやらにあっていた。

最初は物を隠される程度だったのが、だんだんとエスカレートしていった。

祖父は気づいてはいたが、証拠が無く、止められずにいた。

そしてある日、ついに我慢できなくなった俺は、祖父がたまたま留守で自主練となった日に、独りで兄弟子達に復讐することを決意した。

俺が奇襲をかけようと竹刀を振り抜いたちょうどその時ー

「待てよ。」

「何だよ・・・」

「楽しそうだから俺も混ぜろよっ」

そこには、悪戯を思いついた少年のようなー少年だがーの笑みを見て、俺は最初何を言われてるのか全く気づかなかった。

「おい、ボーッとしてんなよ！　俺1人でやっちまうぜ？」

そう言ってその少年は剣を構えた。

今も昔も変わらない、亜流の構え―二刀流―

んでもって・・・

「・・・て、ユウ！ユウってば！！」

ん・・・？

何これ、デジャヴ？

だが今回はほっぺたに痛みは感じない。

うっすらと目を開けると、俺を覗き込む2人の親友（あくゆう）の顔があった。

「お、気がついたか」

「心配させないでよね・・・もう・・・」

「ハハハ、悪ぃ悪ぃ・・・　んで、ここどこだ？　意味わからん穴に変なこと叫びながら落ちていったとこまでは思い出せるんだが・・・」

「うむ、俺もそれ以降の記憶が無いな。　」

「で？　どーすんのよこれ」

ここがどこだか分からない以上

下手な行動は取らない方がいいだろう

「誰か迎えに来てくれりゃいいのにな～」

「そんなに都合良く現れるヤツ、恐らく面倒ごとか敵意を持ったヤツぐらいだな」

どのみち面倒ごとか・・・

なんか、嫌な予感しかしねえや・・・

ｓｉｄｅ　国境警備隊

「・・・む？この気配は・・・　父さんっ！！」

ん？何か電波を受信しました。

まぁ、気のせいでしょう。うん。

とりあえず、魔力を感じたのは真実ですし、行ってみますか。

キングクリムゾン！！

移動しました。

でと、

先ほども言いましたが、膨大な魔力を感じ、発生地点に来てみたのですが・・・

「・・・何者？」

相手は視認できる限りで、３人

男が２人に女が１人です。

・・・が、

どう考えてもぶっ飛んだ魔力量です。

私たち国境警備隊の中から精鋭１０名を集めてこの地点へ来たのですが、

その１０人の魔力の総量よりも、相手３人の総量が莫大に多いのです。

簡単に言って・・・

私たち＜＜＜＜超えられない壁＜＜＜＜＜Σ（、・ω・、）＜＜＜＜彼ら

私たちなんかで止められる相手じゃない・・・。

「ユナ隊長・・・　あいつらは・・・？」

部下の１人が震えた声で話しかけてくる。

「わからない・・・ただ、相当の使い手・・・」

「一応、牽制してみますか・・・？」

「多分、やられる。でも・・・」

さらにおかしいのは、相手の警戒心と敵意の無さ。
奴らなら、真っ先に破壊活動を始めるはずなのだが・・・

「でも、侵入者ではある。　陣を描いて。　込めるのは束縛。　対象はあの３人。
　気づかれないよう、急いで。」

この陣にさらにアレをこめて・・・

よし、

これで、何とかなるだろう・・・

１時間ももたないかも知れないが・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ん・・・？

先刻から嫌な予感しかしないであります！大佐！！

いや、だってまた落とされたときみたいなナニカがまとわりついてきてさ・・・

「ねぇ・・・またなの？」
呆れ顔の夏美。
「ハハハ、またらしいな。　ユウ、お前なんか悪いことしたか？
あ、もしかして、センコーの呪いとかか？　」
「こんなことできるセンコー居たら拝んでみたいっつーの。
畜生・・・もう何が起こっても驚かねーぞ！神様（バーカ）！！」
「おぉ、ユウがついに壊れた。」
なんて、俺たちはじゃれ合いながら立ち上がろうとした。
が。
「「「・・・」」」
立ち上がれない。
ナンデダロウナー　オカシイナー
いや、もしかしたら気のせいかも、
もう一度・・・
「「「・・・！！！」」」
まったくもって動けん。

「はぁ・・・　こりゃあ厄介なやつらに目をつけられたかな・・・」

「ほんと、ユウになんか憑いてるんじゃねえか??」

「マジ勘弁ｗｗｗｗ」

「ブーンブンシャカブブンブン♪」

雰囲気がカオスになりかけてるぅ!!

何とかして、話題を変えなければ!!

「・・・む?」

「どしたや?」

すると突然さっきまでふざけていた賢人が真面目な顔になった。

「いや、この力の流れが俺の知ってるものとよく似ていたからな・・・」

「ホントに!?　早くときなさいよっ!!」

お、なっちゃんやっとしゃべった。

「ああ、ちょっと待ってくれ・・・ふむふむ・・・」

そういうと、黙考しだした賢人。

「じゃあ俺は周囲の気配でも探っておくか・・・」

「んじゃあんた北やってよ。　あたし南探るから。」
なんで気が探れるかって??　ご都合主義だ！
すると・・・
「北に強弱5人。　そのなかの1人、一番強いのが術の媒介だ。」
「南も5人。　こっちは1人突出して強いのがいるわ。」
むぅ、やっぱり囲まれてるか・・・
「賢人、そっちの首尾はどうだ?」
「あと15分くれればってところかな。」
15分・・・　それまでに襲ってこないことを願うしか・・・
side　リフル
「あんの　無鉄砲姫がぁぁぁぁぁ!!!!!」
私は今、ドラゴンに乗って空を猛スピードで飛んでいます。
理由は簡単。　姫様にパシられたからです。はい。
今までもこんなことはあったよ?　そりゃいっぱい。

ドラゴン逃がしたから捕まえてきて～　とか

城下町行ったら王家の紋章落としたから探してきて～　とか。

まぁ、ほかにもあったが・・・・

それよりも今回だよ！！

「ニンゲンを回収してこいだぁ！？」

おっと、声が出ちまった。

最近ずっと儀式場と私室を行ったり来たりしてると思ったら・・・

まさかニンゲンの召喚をしていたなんて・・・・

あんの馬鹿姫は・・・・

「もう少し周りに相談してからにしろっての！！」

そういいながらも、姫のワガママに答える私は・・・　ハァ・・・・・

キングクリムゾン！！　作者は投げた！！

ん？いつの間にか国境付近についてたね。

とりあえずドラゴンから降り、近くに居た警備兵に聞き込みを。

「ん？　リフルさんじゃないか。　」

先に声かけられちゃったか。

「おう。　久しぶりだな。　んで、ユナは？」

「ああ、ユナさんなら、さっき強い魔力反応を感じて森のほうへ行ったけど？」

「そっか、ありがとな。　」

「あっ！　結構強い反応だった・・・って　聞いちゃないか・・・」

☆★☆★☆

ヤバイヤバイヤバイ！！！

あいつが向かったら絶対戦うじゃねぇか！！！

どうにかして止めないとっ！！！

とりあえず・・・

「今は走るしかねぇ！！！」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ガサゴソッ

「誰だっ！！」

某鋼歯車の敵兵の言葉ではございません。
茂みからフードつきの服を着た小柄な少女が現れた！
「私は国境警備隊隊長ユナ。　あなたたちは何者？」
おおう、警戒心と敵意の塊じゃねーか。
ご丁寧に杖まで持ってやがる・・・
が、名乗られたからには、名乗り返さないとな。
それに時間も稼がないと・・・
「俺はユウ。そこに居る2人といっしょに穴から落ちてきた。んでと・・・」
「ああ、俺はケントだ。」
「あたしはナツミよ。」
「穴・・・？　で？　何者なの？」
「何者・・・ねぇ？」
ん～・・・酷く回答に困る質問だな・・・
「俺たちは人間だ。」
なんて、ふざけてみる。

「ニンゲン！？」

え？分かってなかった？ちょwwwwおまwwwwww

すると、周りから9人ぐらいのフードをかぶった魔術師然としたやつらがわらわらと出てきた。

―ニンゲン？―ホントか？―

そんな声が聞こえる。

「あんたたちは人間じゃないの？」

俺たち3人を代表して、なっちゃ「ギロッ」ナツミが尋ねる。

すると、さっきユナと名乗った少女が

「私たちがニンゲン？　とんでもない。　私たちはエルフですよ。」

そういって耳を見せる。

「耳がとがってる！！」

そう、それは、漫画とかゲームとかでよく見かける、鋭くとがった耳であった。

「耳がとがってない種族なんてのは居ませんよ？　種族ごとに違いはありますが・・・　」

兵士の一人が不思議そうにそういった。

なぬ・・・？

これは・・・・・

「異世界トリップか・・・　また面倒な・・・」

そういわれてみると、確かに空気の質とかが違う気もしなくは無い。

先生、俺、異世界にきたらしいぜ・・・

勉強、しなくていいみたいだぜ・・・

なんて物思いにふけっていると、ユナが話しかけてきた。

「そういうわけだから、耳を見せて。　それが貴方たちがニンゲンだって証拠になるから。」

「ん？　なんで人間の耳がアンタらと違うって知ってるんだ？」

「それは、伝説や神話の類で貴方たちニンゲンが出るから。」

なんと！俺たちは神格化されてましたかっ！

「どんな内容なんだ？」

ケントが興味津々という感じで尋ねる。

「あー・・・というか、その前にコレをといてくれないか？？」

「嫌よ。　まだ耳見てないもの。」

「さいですか・・・んじゃほい。」

髪をかきあげ、耳を見せる。

「っ！！」

ユナ・・・かなり驚いたらしいな・・・スマンカッタ。

周りも結構動揺してんな・・・・

ちなみに、何で俺たちの耳が見えないかって言うと・・・

俺→校則違反になる程度の長髪。耳は前からは見えない。　よく叱られたなー。

賢人→テンパ。俺と同じぐらい伸ばしてて、

前からは見えづらい。

夏美→一応女だし、髪はセミロング？っぽい。　耳は隠れてる。

んで

解いてもらった後、みんなに土下座された。

「「「「「「申しわけございませんでしたっっっっ！！！」」」」」」

どうやらこの世界での人間は偉いらしいな・・・

「とりあえず、伝説とやらを聞かせてくれ」

「は、はい！　えと・・・短めのものでは・・・」

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんが居ました。
おじいさんは山へ芝刈りに
おばあさんは川へ洗濯に行きました。

すると、川の上のほうからどんぶらこ～どんぶらこ～と
桃が流れてきました。

おばあさんは、その桃を持って帰り、食べようとしました。

その桃を割ると、仲から耳の丸いニンゲンの男の子が出てきました。

おじいさんとおばあさんは（中略）

桃太郎はある日、近くの村がオーガに襲われていると聞き、（さらに中略）

桃太郎は、キビダンゴと呼ばれる丸薬を用いて、聖獣のキジ、サル、イヌを呼び出し、
オーガの魔窟を殲滅しました。
そして、村には平和が戻りました。

めでたし。

「「「って・・・桃太郎じゃねーか（ないの）っ！！！！！」」」

いやいやいや、桃太郎がこんな神格化されるとは思ってもいなかったぜ！！

「しかも、聖獣って、あの3匹も位上がりまくりじゃねーか！」

「？？？」

ユナが不思議そうな顔でこちらを見つめている。

「いや、キジはどうか知らんけど、俺の元居た世界ではサルもイヌも普通にその辺跋扈してるんだよ・・・」

『！！！』

国境警備隊一同驚いております大佐っ！

まぁ、そうだろうね。

子どものころから聞かされた伝説の中に出てくる聖獣が、その辺歩き回ってるとか聞かされてびっくりしない人とか居ないだろうね。

うん。

と・・・

「ユウ様っ！！」

ユナが目をキラキラさせて俺の手を取りながら

「もっとユウ様の世界の事をお聞かせ下さい！！」

なんて・・・

上目遣いで言い寄ってきた。

「あ、あのさ、ユウ様っｔ「間に合えええええ！！」おうふっ！！

?

第2話　異世界入りとかマジ勘弁ｗｗｗ　ｂｙユウ（後書き）

ネギ（以下Ｙ）前回予告したので、人物紹介！

ユウ（以下ゆ）今回は俺らしいぞ～

Ｙ）インタビュー形式でいくからね？

ゆ）ういういい

Ｙ）まずは趣味！

ゆ）修行と昼寝

Ｙ）特技は？

ゆ）授業中にモンハンすること？

Ｙ）かちゃかちゃ言わない？

ゆ）ソレを言わせないのが俺クオリティー

Ｙ）廃スペックか・・・

ゆ）うるせーｗ

Ｙ）・・・好き／嫌いな食べ物は？

ゆ）肉／特になし、かな？

Ｙ）剣の構えは？

ゆ）相手に左を前にした半身で右の剣をぶらーん・・・と・・・・

わかる？

Ｙ）読者様、ゴメンなさいｏｒｚ

ゆ）ハイハイ、次は？

Ｙ）あ～、これは・・・

ゆ）？？？

Ｙ）いや・・・好きな人は？

ゆ）なんだそりゃ？　特に居ないけど？

ダダダダッ・・・（廊下を走り去る音）

ゆ）？？？何だ今の・・・
Ｙ）自分の胸に手を当ててよく考えて見るんだな・・・
ゆ）？？？
Ｙ）はぁ・・・こんなのはほっといてと。

今回ちょっと中途半端な感じになってしまったので、次回をできるだけ早くあげたいと思っております。はい。

で、私事ですが、このサイトで「目だま」というリアフレがオリジナルで「カゲツキ」という作品を出しております。
よろしければそちらも是非読んでみて下さい。

ゆ）いいのか？宣伝しても
Ｙ）許可はとったしな。　もしかしたらあとがきクロスオーバーするかもよ？
ゆ）ｍｊｋ！？
Ｙ）ｍｊｄ。

・・・・。

Ｙ＆ａｍｐ；ゆ）では、また次回でおあいしましょう！！！

スルースキルが１あがった！！

９／２５　少し修正

第3話　木刀って結構丈夫だよな　ｂｙ賢人（前書き）

更新早くするとか言いながらこの体たらく・・・

まことに申し訳ありませんっ！！！

だんだん文章が雑になってきてる気もするし、短いし・・・

終わりは中途半端だし・・・・

・・・・・

これからもがんばりますので、お読みいただければ幸いです・・・

では、３話です。

第3話　木刀って結構丈夫だよな　ｂｙ賢人

ｓｉｄｅ　リフル

現場が近づくにつれて、感じる魔力もだんだんと大きいものになってくる。
その中には、ユナの部隊が得意とする、「陣術魔法」の魔力も感じ取れる。

・・・と、その時、陣に供給されていた魔力が途絶えた。

―ッ！！？　まさか！！

現場はもう目の前。

リフルは走るスピードを上げながら現場へと飛び込んだ。

「うおぉぉぉぉぉ！！間に合えぇぇぇぇぇぇぇ！！！」「おうふっっ！！？」

彼女が着地した場所には、哀れな1人の少年の後頭部があった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「「たいっへん申し訳ございませんでしたぁぁっ！！」」

「いや・・・もういいから・・・　ユナもリフルも頭あげてくれ・・・」

後頭部をいきなり踏みつけられるとは思わなかったぜ・・・・

「それで？　リフルはなんでそんなにあせってたのさ？」

「いや、実は・・・　お恥ずかしいことながら・・・　ユナがやられたと早とちりして・・・」

「魔力探れば生きてることぐらいわかるでしょっ！！？ほんとにごめんなさい。ユウ・・・」

ちなみに、様づけは禁止しました。

背中がムズムズするからねっ！

「うぅ・・・」

「まぁまぁ、ユナ。　心配してくれてたってことじゃないの」

「それはそうですが・・・」

なんか、このまま終わりそうに無いな・・・

すると、察したのか賢人が

「で？　リフルとやら、　俺たちを迎えに来たんじゃなかったのか？」

「ああ・・・じゃなくて、はい。　あなた方を召喚した第四皇女、レイン様からの勅命で・・・」

「だったら、案内してくれないか？　俺たち腹も減ってるし・・・」

「無論そのつもりだ・・・です。　ですが、ここから１０日ほどかかりますが・・・？」

「つーか、第四皇女はなんで俺たち人間を召喚したんかね？」

「実は・・・」

「まぁまぁ、そんなことは会って本人に聞けばいいさ。　とりあえず今は移動しよう。」

「そうだな。　しかし、１０日か・・・　それに今から腹ごしらえもしたいんだが・・・」

「それでしたら、国境に少しばかりですが食料があります。　それをお持ちください。」

「いいのか？ユナ、国境への支給品だろ？」

「いいのよ、それに大切なお客様でしょ？　なんなら私たちも城まで一緒に護衛するけど？」

「なっ！？　あたし１人じゃ不安だってか！！？」

「まぁ、それもあるわね。　あと、近況報告もしたいし。」

「不安なのかよっ！！」

なんか2人でヒートアップしてらっしゃる・・・

「あの～・・・　お話中わるいんだけど、とりあえず国境とやらに連れて行ってくれない？　お腹すいてるのよ・・・」

ナイス！なっちゃん！！

「「はっ！！申し訳ありません！！」」

つーわけで、何とか飯にありつけそうだな・・・

時間ジャンプだぜぃ！！　ひゃっほーい！！！（作者）

ん？なんか今電波が走ったような・・・

まぁいいや。

ちなみにいろいろあって現在まだ森の中

なぜかって？　それはね・・・

「さっすがファンタジー！　魔物もいっぱい居るネ☆」

「賢人、壊れてる場合じゃないぞ・・・」

見事に１５匹ぐらいの魔物たちに囲まれてたとさ。アハハッ☆

「皆さんはお下がりください・・・　ここは私たちが・・・」

「いやいや、君らもさっきの戦いで疲れてるだろ？　俺らも戦えるからさ。」

「だとよ、ユナ。　お手並み拝見と行こうぜ？」

「しかし・・・」

「いいのよ、戦うのは慣れてるから。」

お前は試合だろ・・・

「まぁ、後方は俺らがやるから、前方はそっちにまかせるわ。　夏美、賢人、たのんだ。」

「あいよ～」

「はいはい。」

そういって獲物を構える。

「・・・わかりました。ですが、１つ後注意を、こいつらは火を操る魔物です。　といっても火の粉を纏う程度ですが。」

「わかった。　気をつける。」

そういって目の前の一匹に集中する。

・・・見た目はただのオオカミっぽいんだけどな・・・

なんて考えながら後ろに回り込むようにステップを踏む・・・と。

ヒュッ！

「ありゃ？」

いつの間にかオオカミの後ろに回りこんでいた。

俺こんなに動けたっけか？

目の前の１匹は俺を見失いオロオロしている。

体が思った以上にうごく・・・？

自分の身に起こったことに疑問を抱きながら、目の前の敵を沈めた。

ほかの２人を見ると、同じように敵を沈め、驚いた顔をしていた。

ｓｉｄｅ　リフル

まったく見えなかった・・・

一目見たときから、只者ではないことは分かっていた。

どれほどのものなのか、この目で確かめようと思っていた。

が、あの３人が敵の背後に回る動作をまったく捕らえることはできなかった。

あたしだって城で親衛隊をやっている以上、武術には自身がある。

城の中で１番とは行かないが、上位に食い込む実力はある。

だが・・・

「何なんだ・・・あいつらは・・・。」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

☆★☆★☆

あの後、見事に魔物たちを撃退し、国境の詰所にたどりついた。

ユナたちは、食料を取ってくるといって、奥のほうへ行ってしまっ

た。

それを見送りながらぼーっとしていると、リフルにすごい形相で詰め寄られた。

「アンタらいったい何者なんだ！？」

「いや、ただの人間だって。」

「いや、ニンゲンがすごいのは知ってるが、みんなあんなふうに瞬間移動できるものなのか！？」

「できるわけ無いだろ・・・　てか、俺たちもできると思ってなかった。」

「・・・は？」

「いや、だから元からできたわけじゃないんだって」

すると、賢人が

「もしかして、こっちの世界の補正じゃないのか？」

「ホセイ？」

リフルが首をかしげる。

「ああ。　こっちの世界では俺たち人間は神話とか伝説に出てくる生き物なんだろ？　だったらこっちの世界に来た人間はスペックがあがってるんじゃないのかと思ってな。」

「なるほど、それであたしたちにあんな芸当ができるようになったのね」

「おそらくな。」

「な、なぁ、あたしにも分かるように・・・」

リフルが頭から煙を出している・・・

「まぁ、要するに俺たちはこっちの世界に来て強化されてるってことだ。」

「なんでだ？」

「「「わからん！」」」

「・・・さいでっか・・・。」

リフルが諦めたところで、ユナがちょうど食事を持ってきてくれた。

「保存の利くものと水ぐらいしかありませんが・・・」

「いや、食べ物があるだけありがたいよ。」

俺たちは干し肉とサラミで腹を満たした。

何の肉かちょっと心配だったけどね・・・。

時間跳躍だぁ～～～～！！！！（宇宙意思）

ん？なんか（ｒｙ

まぁいいや。

「俺たちは今ユナとリフルと一緒に城に向かっています。」

「誰に説明してんのよ」

「液晶の前のみんな。」

「だれよそれ」

「はて？だれだろう？」

「・・・」

まぁ、気を取り直してと。

リフルが最初にドラゴンをつれてきたときはマジびびった。

「ああ、コイツあたしの相棒のレイアって言うんだ。よろしく。」

モンハンが頭に思い浮かんだ俺は悪くないっ！！

「ムーンサルトとかできるのか？」

「？？？」

「スマン、聞き流してくれ・・・」

ってこともあったな。

閑話休題（使ってみたかった！ｂｙ宇宙意思）

ええいっ！黙れ電波っ！！！

「というわけで、後どれぐらいだ？」

「なにがというわけなのか分かりませんが、まだまだですよ。」

「そうか。　城ってどんなところなんだ？」

「とてもきれいなところですよ。　緑を基調とした外壁や屋根が有名で、観光にほかの種族たちも来るほどです。」

「ほかの種族って？」

「ああ、そうでしたね。　ちょうどいいですし、ご説明します。」

第3話　木刀って結構丈夫だよな　ｂｙ賢人（後書き）

Ｙ）はいどーも、というわけで？　今回は賢人君です。
賢人（以下け）好きなものは青汁嫌いなものは野菜ジュースよろしく。
Ｙ）登場がイミワカラン。
け）お前が作ったからな。
Ｙ）それならばしょうがない！
け）んで、趣味と特技だっけ？
Ｙ）あれ？俺要らなくね？
け）趣味はラノベの新作をチェックしてニヤニヤすること。
　特技は風水術でいいのか？
Ｙ）趣味がヘンタイです。本当にありがとうございました。
け）よせやい！照れるじゃねーか！
Ｙ）誰もほめてねーし、あとキャラが統制されてねーし
け）お前が作ったからな
Ｙ）それならば（ｒｙ
・・・・・

Ｙ）剣の構え方は？

け）お前の文章力で表現できるかはなはだ疑問だが、ぶっちゃけロイド　　だ。　半身になって左右に１本ずつ剣を持つアレだな。

Ｙ）テイルズ分からない人、すいません。あ、ちょ、石なげないでっ！！

け）ハハハ、いいざまな！！！

Ｙ）・・・ｏｒｚ

け）そろそろ終わる？

Ｙ）うん・・・

というわけで、今回もまた中途半端な終わり方になってしまいた・・・。

文才ェ・・・・

今後も精進していく所存でありますゆえ、見捨てないでください・・・　あ、ちょ、いす投げないでっ！！！！

け）だーめだこの作者。

はぁ・・・

それでは、今後ともこんな駄文ですが、おつきあいいただければ幸　いです。

Ｙ）ちょ、テメ、ユウ！お前まで一緒になって！！　あ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、作者は皆様のげｂ　アーッ！！！！！

け）だーめだこりゃ。

※まことに申し訳ありませんが、もうすぐ試験の期間なので、更新が著しく遅くなります。

ご了承ください。

第一回　談話室（ぇ（前書き）

この内容は、本編にまったく関係ありません。

作者の脳みそを垂れ流しただけです。

新話更新ではありません。ごめんなさい。

第一回　談話室（え

ユウ（以下ゆ）はいどーも。こんにちは。ユウです。

ケント（以下け）この談話室は、うp主のアイデアが尽きた時の「お茶濁し」として、使われるようです。

ナツミ（以下な）なお、この談話室においては、メタ発言、ネタ発言、キャラのゲシュタルト崩壊は当たり前です。

ネギ（以下Y）もしもこれを新話更新だと思われた方がいらしたら、大変申し訳ございません。話の内容にはまったく関係ございません。作者の戯言です。

ゆ）傑作でもなんでもないけどな。

Y）・・・orz

ゆ）さてと。とりあえず、今回は作者のペンネームについて聞いてみようか。

け）確かにな。なんでよりによってあの薬味坊主と一緒なんだ??

Y）ああ、俺は薬味坊主のほうをもらったつもりは全くないよ?

な）パクったのは認めるのね・・・　でも、ほかになんかいたっけ?

Y）聞いて驚け!　俺がリスペクトしたのは、GAN○Z　のネギ星人だっ!!!

3人）　（´・ω・`）・・・。

Y）・・・

4人）・・・？（´・ω・`）

ゆ）よ、よし、次行ってみようぜ！

Y）そ、そうだな。　え～っと・・・

け）ほら！　作中ではあまりされてない俺たちの容姿の描写とか！！

Y）俺の文才でできるとでも？？

ゆ）いや、そこはやれよ・・・

Y）えー・・・　んじゃあ簡単に・・・

ユウ>>設定考えてなかった
ケント>>設定考えて（ｒｙ
なつ（ｒｙ

・・・・・

Y）という感じなんだがどうだろう？

ゆ）要するにお前は思いつきで全部書いてたってことだな。　理解した。

３人）うｐ主には改革が必要だ。

Ｙ）登場人物から言われるとか末期だな。（てか登場人物＝作者の心の声なわけで以下略。）

ゆ）うｐ主はどんどんアブナイ人間になってるな。

Ｙ）それは自覚してるさ。　今だって学校で授業中にこんなモノ書いてるんだからな。

な）周りの目とか気にならないの？

Ｙ）ならん！　強いて言うならば、先生の監視の目が怖いことぐらいだぜ！

３人）（これが末期の患者か・・・）

Ｙ）フハハハハ！！　横では数学のやり直ししてる奴だっているんだ！！　小説書いたって文句あるまい！

ゆ）これは小説じゃなくて、ただの駄文散文自己満足じゃねえか！！！

Ｙ）そうとも言うな。　この小説は、授業中にできています。

け）はいはい。カオスカオス。

Ｙ）リアルでそれを言われたことのある俺は結構イタイんだが・・・

け）こんな駄文だけで、もう１０００文字超えてるんだが？

Ｙ）イッツノマニーｗｗｗｗ

ゆ）もうこれ別作品でうｐしたほうがよくね？

Ｙ）こんな駄文を？ｗｗｗｗ

ゆ）サーセンｗｗｗｗ

Ｙ）てな訳で、そろそろ周りの人たちの目が痛くなってきたので。

ゆ）お、現実逃避終わりか？

Ｙ）ヒートアップするに決まってんだろうがっっっ！！！！　てか、おれの学校で今業務連絡なったぞ！！

な）リアルネタやめてほしいんだけど・・・・

Ｙ）現在行数９１、段落４７だってさ・・・ハハッ死のう・・・

け）こんな風にｇｄｇｄ書いてるほうが気が楽ってことか？

ゆ）じゃねーの？　こいつこんな―脳みそ≪おはなばたけ≫してるし。

Ｙ）ちょっとこの文章見直してくるわ。

薬味見直し中・・・

け）おかえりんこ

Ｙ）ただいまｎ

ゆ）言わせねえよ！！？

Ｙ）ＨＡＨＡＨＡ！我が家ネタか！！

ゆ）そのテンションどうにかなんねぇ！？　俺も頭おかしい人みたいじゃねえか！！！

Ｙ）ああん？　曲がりなりにも俺から生まれたんだ！　頭おかしいのはパッシブだろう！？

ゆ）当然の事実みたいに言われましてもね・・・

け）諦めろ、これが俺らの作者だ・・・（達観）

な）ははっ・・・もうどうにでもなればいいのよ・・・

ゆ）お前らっ！！

Ｙ）無駄だよ・・・

ゆ）なっ！？テメェ！２人に何しやがった！！？

Ｙ）くくくっ・・・　何、ちょっとばかり達観してもらっただけさ・・・

ゆ）てか、もうネタ尽きただけだろ？

Y）うん。

ゆ）じゃあ終われよっ！！！

Y）終わるよっ！！

☆★☆★☆

Y）というわけで、こんな駄文ですが、読んでいただきありがとうございます。

大変拙い文章ですが、お楽しみいただければ幸いです。

では、今後ともよろしくお願いいたします。

第一回　談話室（え（後書き）

ネギま！の二次創作を投稿してみました。

一晩でＰＶが追いつかれました。

二次創作ってすごいなー

・・・ｏｒｚ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6501n/

剣士3人異世界入りっ！？

2010年10月31日13時31分発行